

論文の内容の要旨

氏名：侯 鵬暉（コウ ホウキ）

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：日本における写真展覧会の史的研究

—戦後から写真美術館の成立まで（1945-1995）を中心に—

本研究の目的は、戦後日本における写真展の発展とその変遷を分析し、考察することによって、日本における写真展の在り方の変遷とそれが意味するところを明らかにすることである。そのため、本論文では、戦後の写真展覧会の歴史と日本独自の写真展文化の発展過程を4期に分けて論じた。

研究方法としては、主要な写真月刊誌『アサヒカメラ』等に掲載された東京を中心とする写真展のデータを可能な限り集め、写真展の総合的な年表を作成し、基礎資料とした。

また、これまで戦後の日本写真史に関する書籍の中で、写真展の変遷という観点からすると、論述されたものは無く、そこに写真展の調査に基づく戦後日本写真史の研究の意義を主張した。

第1章は、日本との比較という観点から、母国台湾における写真展の歴史と現状について論じた。台湾では、日本のように多種多様な写真ギャラリーで写真展が盛んに行われるということではなかったが、1980年代に入ると台北市立美術館、国立台湾美術館、高雄市立美術館の三館が開館し、それ以降美術館でも写真展が開催されるようになった。しかし、現状ではこれら三つの美術館とも写真部門は設置されておらず、台湾の写真展の現状は日本の写真展の状況と大きく違っている。

第2章は、戦前の日本における写真展覧会について概観した。1893年に日本写真会の主催した「外国写真展覧会」は、日本における写真展の始まりであった。この展覧会をきっかけに芸術的な写真表現を真剣に追求するということが始まった。また大規模な展覧会としては、1931年の日本の写真表現がピクトリアリズムからの脱却のきっかけとなった「独逸国際移動写真展」などがあった。

戦前の東京地区の主要な展示会場としては、三越、高島屋などの百貨店の催事場が利用された。また他には、朝日新聞社の陳列室、小西六本店内の展覧会場などが存在したが、当時は写真展の展示会場は少なかった。

第3章は、戦後から東京都写真美術館成立までの50年間の写真展調査を行ない、展示会場、展示方法、作家などの観点から考察した。

展示会場の推移では、戦後の社会復興状況の好転と朝鮮戦争の特需景気の影響によって、感光材料の生産状況が次第に安定してきたことが読み取れる。また、1950年代になると、新しい写真専門ギャラリーの開設につれて、写真展数には顕著な増加が認められる。そして1950年代後半になると高度経済成長期に入り、メーカー・ギャラリーにおける写真家の個展数が増え、若い作家の育成という点でも大きな効果があった。また1970年代後半に登場してきたオリジナルプリントを扱う写真専門ギャラリーや自主ギャラリー、西武百貨店が開設した西武美術館、さらに個人美術館の先駆となった山形県酒田市の土門拳美術館の出現など、各種の展示会場は次第に特化していく傾向があった。そして1980年代後半になると、1988年に開館した川崎市市民ミュージアム、1989年に開館した横浜美術館、1990年に第一次開館した東京都写真美術館などの写真部門をもつ美術館が登場した。

展示方法の変化では、終戦直後の10年間の写真展は、主にマット紙、ベニヤ板に貼り付け、あるいは木製パネルに水張りする方法が採用された。当時の写真は印刷出版を目的に制作されることが多かったため、展示される写真は消耗品として扱われることが多かった。また1950年代後半

になると、木製写真パネルで展示したものが多くなった。さらに1970年代以降、テレビの普及等から、グラフィジャーリズムの衰退があった。そうした中で新しい写真表現の場は、作家の個性を強調するオリジナルプリントに転換していった。オリジナルプリントの展覧会が多数開催され、写真を展示と同時に販売する展覧会が増加したのである。また、1980年代以降、会場全体を利用したのインスタレーションの空間的な展示が出現した。

作家については、終戦直後にアマチュア写真家団体が復興して写真界が活性化し、専門の職能写真団体が結成され、若手写真家たちの模索成長期であった。1950年代後半になると、「10人の眼」展の出品者の中から「VIVO」という写真家グループが結成され、戦後の若い世代の写真家たちが輩出しはじめた。1974年にはワークショップ写真学校が開設され、講師と生徒たちが関わった写真展が多数開催された。その後、生徒たちが開設した幾つかのギャラリーは、日本における自主ギャラリー文化の発端となった。さらに1970年代にはダイアン・アーバスやリチャード・アベトンなどの展覧会によって、アメリカの写真界の最新状況が逸早く日本に紹介され、日本の写真界に大きな影響を及ぼした。また、1970年代後半以降もう一つ注目すべきことは、PPS通信社がデパートで開催した多数の作家個展である。当時写真展を扱う美術館はまだ少なかった時期に、PPS通信社が積極的に国内外の作家を紹介する姿勢は評価すべきと考えている。

第4章では、日本の代表的な写真家の作品発表形態について分析した。なお、写真展が社会や写真界に大きな影響を与えた例を取りあげ、果たされた役割についても論述した。

戦前から活動してきた写真は、写真雑誌での発表や、新聞社が出版する写真集を重視する傾向が強く、写真展の開催数は比較的少なかった。戦後世代の写真家たちは、雑誌や写真集を重視する傾向が依然として強かったが、写真展の開催も同時に行うことが多くなった。また、自主ギャラリーを運営する、あるいは自分の出版社をもつ写真家も存在し、作品発表の形態は多彩なものとなったのである。

日本における写真展覧会の一つの大きな流れは、写真の歴史展である。写真発明の記念展や、日本における写真表現史が年代順に継続的に開催されている。とりわけ1968年と1975年に開催された二つの写真歴史展によって、当時の写真界に写真資料の収蔵、整理の重要性を本格的に意識させ、さらに写真美術館設立運動の契機となり、写真展の歴史の中でも重要な位置付けを占めるといえる。

結論

本論文では、基礎資料として写真展年表データベースを作成した。この資料をもとに日本の写真展文化の特質や歴史的経緯およびその意義について次のようにまとめ、結論とする。

日本の写真展文化の特質の第一は、メーカー・ギャラリーの存在とその功罪である。高度成長期以降、メーカー・ギャラリーでの写真家による個展の数が顕著に増え、プロフェッショナルのみならず、若手写真家の育成、写真愛好者の増加といった点で効果があった。

しかし、メーカー・ギャラリーは自社製品の宣伝のため、使用する機材や感光材料など様々な制限もあった。それに、より多くの人に展示の機会を与えるため、会期が一週間程度と短期間のものとなりがちであった。そしてプロフェッショナル作家とアマチュアの展示が混在していることも多く、そうしたことに反感を抱く写真家も決して少なくなかった。

日本の写真展文化の特質の第二としては、デパートにおける写真展がある。デパートが集客を目的として、新聞社などと共催して海外の写真家の作品、あるいは話題性のある展覧会を多数開催した。特に1980年代以前、写真の企画展を実施する美術館は、東京国立近代美術館のみであり、写真展の数も方向性も限られていた。こうした状況の中で、デパートの写真展は、美術館の写真展の役割を分担したといえる。とりわけPPS通信社や西武美術館が開催した多くの写真展は、写真美術館の開設まで重要な位置付けになったと考えている。

日本の写真展文化を語る上で重要なのが、1970年代のオリジナルプリントの動きである。1970年代以降、渡米経験のある作家を中心に、オリジナルプリントの概念が日本に導入された。また海外での展覧会に参加した経験をきっかけに、日本の作家はオリジナルプリントを重視するよう

になり、それ以降の作品制作や展示にも反映された。その後、日本でのオリジナルプリントの展示が増加し、そして専門ギャラリーが開設された。写真の価値と芸術性が次第に認められ、後の美術館で写真を収集するようになったことにも繋がる。

しかし、日本において写真の一般への販売は残念ながら欧米ほど普及しなかった。その原因は、戦後の日本では、印刷での発表が主流であり、プリントは消耗品としての認識であり、オリジナルプリントに対する認識が希薄であった。さらに、写真のオークションなど周辺環境、住宅の壁面を飾る文化がなかったことも、写真の販売に不利になったといえる。

日本の写真展文化として、最後に指摘したいことは、写真部門をもつ美術館の成立とその意義である。1980年代後半、写真部門をもつ美術館が開設され、次第に写真作品の価値に対する認識が拡大していった。また、美術館における女性写真家作品を紹介する展覧会增加した。東京都写真美術館が総合開館した1995年は、年間40万人の入館者があり、写真界や一般大衆にとっても、写真の歴史的、社会的、芸術的意味を確認する機会が多くなった。こうした状況は、1980年代以前には少なかったことである。このように、写真美術館は、より幅広い写真文化の発展が期待される中で誕生した。

戦後50年の歴史の中で、日本の写真展は、独自の態様を示しながら発展し、それが写真美術館の成立にも繋がっていったのである。このことによって、日本における写真文化の進展の可能性がより高くなったと考えている。日本の写真展文化は、これまで述べてきたような歴史的経緯を踏まえ、ますます発展すると思う。

なお、今後の課題としては、1995年以降の日本の写真展について引き続き研究し、合わせて台湾で写真展の歴史を調査し、また台湾と日本の各時期の写真展傾向の比較分析についても研究していきたいと考えている。